「障害者自身が水先案内」

制度改革推進会議

障害者政策の改革案を検討するため、内閣府が先月設置した「障がい者制度改革推進会議▣」。委員の多くが、障害者団体の代表となっているのが特徴だ。障害者が自立できる社会をどのように実現するのか。委員が胸の内を語った。

（梅崎正直）

第1回推進会議で、福島消費者相（手前）のあいさつを聞く尾上さん（東京・霞が関で）

＊会議のインターネット配信（内閣府）のホームページ（http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kaikaku/kaikaku.html#kaigi）

＊過半数は当事者

「きょうは歴史的な日」。1月12日に開かれた第1回会議の冒頭、25人のメンバーを前に、福島消費者相は語った。うち14人は、障害者の社会参加を目指して活動してきた障害当事者だ。

その一人の障害者インターナショナル日本会議事務局長、尾上浩二さん(49)は脳性まひ。「歩けない」という理由で、養護学校に入学させられた。2年間入った施設には私物を置けず、好きな本も取り上げられた。

人生が変わり始めたのは中学生の頃。「教師、他の生徒の手を借りない」という念書を書かされ、大阪市内の普通中学校へ入学したが、級友たちがおぶって移動を助けてくれた。初めて親以外と心斎橋へ遊びに行き、世界が広がった。大学では、6歳年上の同じ脳性まひの男性に出会う。「障害者が町に出ると、差別が向こうからやってくる。自己主張せなあかん」。その言葉に促され、障害者の運動に加わるようになった。

障害者自立支援法に反対して国会に座り込み、過労で倒れたことも。「それもムダではなかった。誰もが排除されない社会を作るため、今回の会議で我々障害者が水先案内人になる」

＊二重の障害を克服

同じく会議メンバーの門川紳一郎さん(44)は、全国盲ろう者協会の理事。視覚と聴覚に障害を持っている。

盲学校小学部3年生のときに、自分だけ教師と一対一の授業に。「聞こえないことが問題なんだ」と意識した。「二重の障害を抱えるのは自分だけ」と孤独だった高等部時代、福島智さん（現東京大教授）が盲ろう者として初めて大学進学したのを知る。衝撃を受け、勇気がわいた。自身も大学へ進み、盲ろう者の社会参加を進める運動に取り組んだ。

通訳者が両手の甲を指でたたいて伝える「指点字」を用いるため、会議の場では両手がふさがり、資料を参照することができない。「ゆっくり、休憩を取りながら進めるようお願いしたい」と話す。多様な障害を持つ人たちのコミュニケーションをどう保障するか。会議の場が、今後目指す社会のモデルとなる。「障害の種別を超えて、良い制度を作れるよう努力したい」

＊参加もれた団体も

会議メンバーには、身体、視覚、聴覚、精神、知的と、各障害の代表が名を連ねる。今夏までに、障害者自立支援法に代わる新制度など、重要課題の基本方針をまとめる予定だ。

一方で、会議への参加を求め、かなわなかった団体、グループもある。その一つの日本発達障害ネットワークは、「発達障害の子どもは小中学校に6・3％、68万人も在籍している。支援を定めた法律もある。会議に加えるべきだ」（山岡修副代表）と、会議発足後も訴え続けている。2日に開かれた第2回会議でも、「発達障害、難病、高次脳機能障害の代表がなぜいないのか」との発言があった。

福島消費者相は「意見を聞いてほしいとの要請をたくさん受けている。会議メンバー以外からのヒアリングを実施したい」と前向きな姿勢を示すが、多様な障害者の期待と要望に応えるのは容易ではない。「障害当事者による制度改革」は緒に就いたばかりだ。

▣**障がい者制度改革推進会議**　昨年末に設置された推進本部（本部長・鳩山首相）の下部組織。①廃止される障害者自立支援法に代わる新しい福祉サービス制度づくり②国連の障害者権利条約批准に向けた、差別禁止、虐待防止に関する法律の策定③人権を守る観点からの障害者基本法の見直し④教育、雇用、バリアフリーなど――が重要課題とされる。